

# 個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅣ

— 基礎学力の向上を目指して —

玉田 和恵\* ・ 神部 順子\*\*

八木 徹\*\*\* ・ 古里 靖彦\*\*\*\*

## 要 約

本研究では、個に応じたキャリア教育を実現するために、基本的な生活を営むための生活習慣の確立、人間性をはぐくむための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育、社会で働くことを意識させるための職業人講話・企業見学・インターンシップなど、さまざまな取り組みを実践し、効果を上げてきた。しかし、学生が社会人になるために最も大きな障害となっているのが、学力低下の問題だということが数年間の取り組みの中で明らかになった。本稿では、小中高段階での学習内容を大学でどのようにフォローアップしていくかということを検討するために、学生の学力の実態及び社会人基礎力の自己評価等を基に検討した内容について述べる。

## 1. はじめに

### 1.1 大学生の就職率

2011年3月に大学を卒業した学生のうち就職者総数は340,656人（男子177,444人、女子163,102人）であり、就職率は61.6%（男子57.0%、女子67.6%）であった。これは就職氷河期の再来と言われた昨年よりは多少は向上しているが、大学卒業生の6割しか就職できないという現状を示している。この状況は日本社会にとっても若者にとっても非常に危機的な状況である。経済状況の悪化により多くの企業が日本国内から海外へ生産業務を移転したり、企業が採用数を減らしたり、学生

の能力不足などが問題視されたりと、さまざまな要因が学生の就職率を低下させていると考えられている。

今回の就職氷河期の再来は、学生側の問題というより日本の社会構造の問題と考えた方がよいのかも知れない。日本の社会構造を変革していかなければ、大学生の就職状況の好転は望めない。しかし、だからといって、大学生側は他人任せで、好景気になることや社会構造が変革されることを祈るだけよいかというそうではない。就職率の低下には学生あるいは学生を育てている側にも大きな問題がある。

### 1.2 企業が求める人材像

現在、就職率は低い状況ではあるが、企業からは「よい人材ならば採用したい」というメッセージが発信されている。就職活動の厳しさは生まれた時期によって運命が左右される非常に過酷な試

2011年11月30日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科教授 教育工学

\*\* 江戸川大学 情報文化学科准教授 情報科学

\*\*\* 江戸川大学 情報文化学科専任講師 情報化学

\*\*\*\* 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

練であるが、どんな時代でも社会から必要とされる人材になれば仕事に就くことは可能である。

では、企業社会はどのような人材を求めているのであろうか。経済産業省では、「企業が採用時に重視する能力」や「経営者が欲しい人材像」に関する調査等を踏まえて、12の要素で構成される3つの能力を含む社会人基礎力を育成することが重要であると提言している（経済産業省2006）。

近年、企業現場では、新しい価値を創出するための課題の発見、解決に向けた実行力、異分野と融合するチームワークなどの能力が強く求められている。また、以前は、社会人基礎力として挙げられている能力については、家庭や地域社会、部活動や集団活動などにおいて自然に育成されるものであったが、家庭や地域の関係の希薄化、教育力の低下などから、これらを自然に身につけることは非常に困難な状況になっている。そこで、これらの力を社会に出る前の段階で育成することが大学教育に求められているのである。

しかし、これら社会人基礎力は、基本的な生活習慣が身につく、良識ある人間性と基礎学力や専門知識が備わった人材にプラスアルファとして求められるものである。社会人基礎力の育成を目指

す前に、その前提となる力を育成することがより重要である。図1から、企業は、採用時にコミュニケーション能力を重視しているが、基礎学力はもちろん必須だと考えていることがうかがえる。採用時に、SPIなどを中心とする基礎学力を評価するための適性検査がどの企業でも実施されていることから、企業が基礎学力を重視していることは明らかである。

### 1.3 大学生の学力低下

では、大学生の基礎学力はどうなっているのだろうか。大学生の学力低下は緊急な対策を要する社会問題となっている。「大学生の学習意欲と学力低下」というテーマで大学教員を対象に行われた調査では、大学教員のうち10人中6人が学生の学力低下を問題視している。私立大学では、「深刻な問題」「やや問題」を合わせると69%を占めている（柳井2005）。緊急に取り組まなければならない課題である。

2011年度現在、在学している学生は前学習指導要領（小学校中学校2002年施行、高等学校2003年施行）による教育を小・中・高等学校で受けた世代である。いわゆる「ゆとり教育世代」と呼ば

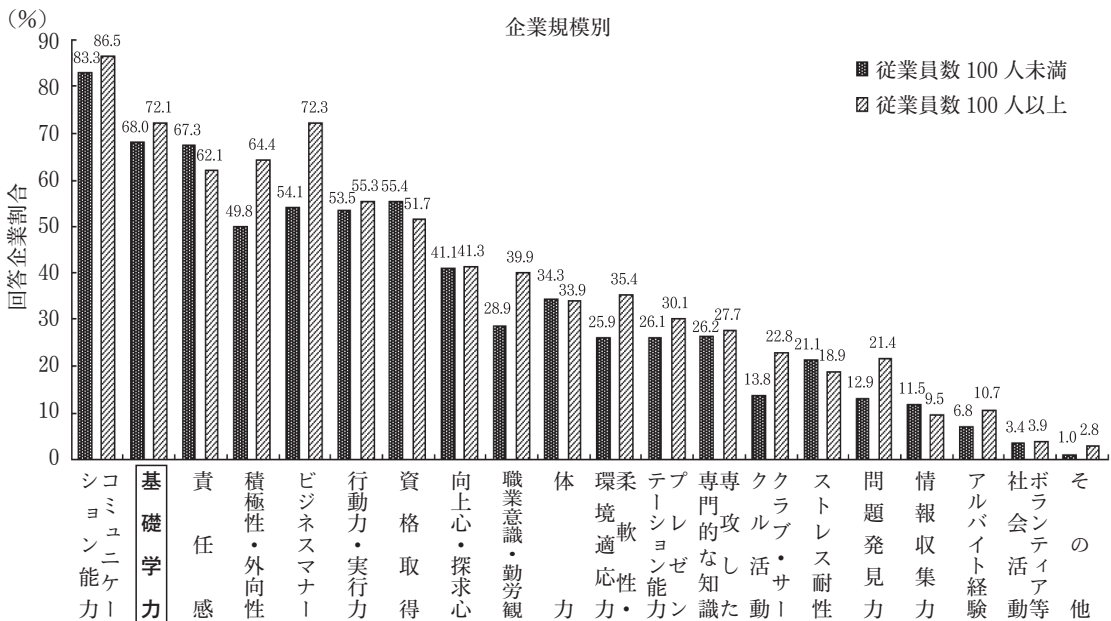


図1 企業が採用時に重視する能力

れている学生たちである。まじめで人当たりがよく、仲間内では協調性があり、大きな問題を起こすことのない世代である。

しかし、教えられたことはある程度まじめにやるが、真剣に学習した経験が乏しい。少子化のため高等学校や大学での受験で、難関校を目指す学生以外は受験のために大きな苦労をしたことがない。そのため、学力試験のために徹底して学習した経験がない学生も多く、小中高で学習した内容が定着していないものが多いのが現状である。今後は、小中高での学力向上の取り組みを期待するが、現状としては、目の前の学生の基礎学力を大学教育の中で向上させることが急務である。

#### 1.4 本研究の目的

本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組みを概観し、社会人基礎力の育成と学生の学力低下の問題に取り組むための要素を抽出するため、以下の事項を明らかにする。

##### ① これまでに情報文化学科で実施してきたキャ

リア教育の取り組みを概観する

- ② 学生が自己の社会人基礎力をどう評価しているかについて、調査を基に分析する
- ③ 本学科に入学する学生の基礎学力について、実施したテスト結果から分析する

## 2. これまでのキャリア教育実践

### 2.1 実践目標

大学教育に求められるさまざまな要請と、情報文化学科のコンセプト、学生の特性に応じた教育を実現するために、以下の目標を達成することのできる教育方法を検討してきた。

#### ① 人間性を磨く

- (ア) 人間としての在り方や生き方について考えさせ、人と関係を作る力、自己をコントロールする力を育成する
- (イ) さまざまな課題を発見し、取り組み、問題解決する力を育成する
- (ウ) 情報を収集・分析し、社会の動きを見据えて現実を正しく理解し判断することがで

<p>【人間性を磨く】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダー研修会・自主勉強会</li> <li>・個人面談</li> <li>・職業人講話、企業訪問</li> <li>・インターンシップ</li> <li>・長崎研修（田上市長との懇談）</li> </ul>	<p>【講演をしてくださった主な方々】</p> <p>千葉 滋胤氏（千葉県商工会議所連合会 会長）          安富 正文氏（元国土交通省事務次官）          増山 律子氏（株式会社フジスタッフ（代表取締役会長））          吉中 昭夫氏（NHK メディアテクノロジー取締役）          三木 明博氏（文化放送 社長）          高妻 孝光氏（茨城大学大学院理工学研究科 教授）          岡 博氏（三菱重工空調システム株式会社 元社長）</p>	 <p>田上長崎市長との 懇談会</p>
<p>【感性を磨く】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル絵日記</li> <li>・百人一首・源氏物語</li> <li>・東海道五十三次</li> <li>・忠臣蔵かるたの復刻</li> <li>・ニューヨーク研修</li> <li>・映画会</li> </ul>		
<p>【学力を磨く】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自主勉強会</li> <li>・研究発表会</li> <li>・早朝英単語学習</li> </ul>	 <p>インターンシップ      自主勉強会      ニューヨーク研修      企業見学</p>	

図2 キャリア教育の実践内容

きる力を育成する

## ② 感性を磨く

(ア) 感性を磨いて、自分の意図を相手に伝えることができる表現力を育成する

## ③ 学力を磨く

(ア) 基礎学力・専門性を磨いて、業務処理に対応できる実践力を育成する

上記の目標を達成するために、本研究グループでは、2008年から2011年度までに、具体的に図2の取り組みを実施している。

## 2.2 実践結果と効果

### 2.2.1 人間性を磨く

人間性を磨く活動では、授業時間外に「リーダー研修会」「自主勉強会」を継続的に実施し、基本的生活習慣の確立、人としてどう生きていくべきかということを徹底指導している。情報文化学科では年2回個人面談を実施することとしているが、本研究グループでは、ほぼ毎日担当する学生が研究室を訪ねて、挨拶とともに、近況報告をするため「毎日が個人面談」と言ってよい状況となっている。学生は教員と対話することによって、挨拶・礼儀とともに大人と対話をするコミュニケーション力を身につけている。

「職業人講話」は、学生の人間性を高め、社会に対す認識を深め、折れない心を育成するために、社会の第一線で活躍している方々の生き様に直接触れるため、職業人を招聘して実施してきた。特に「社会が学生に対して何を求めているのか」ということを痛感させ、これまでの意識を変革させ「これから自分たちはどう生きていくべきか」と

いうことを真剣に考えさせるための機会として位置づけている。

「インターンシップ」では、多くの企業(表1)の方々にご協力いただき、実際の業務を体験させていただくと共に、社会人になるための心構えを学ばせていただいた。「礼儀やマナーの大切さ」「コミュニケーション能力の必要性」「業務に必要な知識・技能が全く自分がないこと」「受け入れてくださった企業の方々、準備を担当した先生方への感謝の気持ち」を修得し、自分たちが多くの人々に支えられながら生きているのだということを実感した。

「長崎研修」では、長崎めぐりや田上市長との懇談を通して、「命の尊さ」や「平和」について真剣に考え、今を生きる自分たちが、何をすべきかということを学ぶことができた。

人間性を磨く活動で学生は、世の中で人として生きていくためには、最も基本となることが「休まない・遅刻をしない」という基本的生活習慣の確立で、次に「挨拶や礼儀」が大切であるということを実感し、人に対する感謝の気持ちと、その感謝の気持ちを相手に伝えることの大切さを学んでいる。また、学生の意識調査では、次のようなことを学んだという記述が多く見られた。

- ・礼儀の大切さ
- ・目標に向かって向上心を持って取り組むことの大切さ
- ・誠意には誠意でこたえる
- ・素直な気持ちで生きる
- ・責任をもって様々なことに挑戦する

表1 インターンシップでお世話になっている企業一覧(略称)

JCN コアラ葛飾	エー・アンド・アイシステム	フジスタッフ
JCN 千葉	エム・オー・シー	文化放送
JCN 習志野	コア	丸紅情報システムズ
JCN 船橋習志野	千葉銀行	丸紅テレコム
NHK メディアテクノロジー	東京メトロ	三菱重工空調システム
アライドテレシス	日本建設工業	リード・レックス
いちかわケーブルネットワーク	八洋	ローム
エイチアイエス		

### 2.2.2 感性を磨く

江戸川大学の教育理念は、「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成」を目指す「人間陶冶」である。一方、情報文化学科には、進路として Web デザインや広告デザインなどネットワークや広告媒体などさまざまなメディアでの表現力を必要とする職業を目指す学生が多く入学する。

そのため人間としての普遍的な教養と感性や表現力を育成することが大きな教育目標となっている。

感性を磨く活動では、ただコンピュータの技術を身につけさせるのではなく、文化的な活動を通して教養・感性を磨き、コンピュータを使って情報発信できる力を育成してきた。

夏休みの課題として「デジタル絵日記」を実施しているが、この活動では絵が得意な学生も、得意でない学生も、個々の表現を工夫し、さまざまな作品を作り上げ、画像と文章の表現力を身につけている。

文化と教養を高めるデジタル作品として、「百人一首（2008 年）」「源氏物語（2009 年）」「東海道五十三次（2010 年）」など、それぞれのテーマに沿って、古典に触れ、実際に現場に足を運んで取材をし、教養を高めると共に、デジタルによる

表現力・感性を磨いてきた。2011 年度は、「童謡」に取り組んでいる。

「ニューヨーク研修」では、ミュージカルやオペラ、美術館鑑賞など超一流の文化に触れると共に、ニューヨークで世界中を股にかけて活躍しているビジネスマンから直接話を聴くことによって、大学の中にいたのでは学べない感性を磨いた。

### 2.2.3 学力を磨く

学力を磨く活動では、大学は学業を修めることが主目的であり、学科の専門科目を修得することが大切だということを徹底指導している。その一方で、就職するためには企業が求める基礎学力を身につけておく必要があるということから、自主的に学習したいという意欲がある学生を 1 年次から集めて「自主勉強会」を実施し、基礎学力の定着を図っている。また、卒業時にこれまで真剣に学習してきた内容について「研究発表会」を行っている。

これらの活動では、人の話を聞く場合にはメモを取るように、社会に出て上司や先輩から教えられたことについて、再度同じ質問をするようなことのないようにという徹底した指導を行っているため、「メモを取りながら人の話を聞く」とい

表 2 社会人基礎力の 3 つの能力・12 の要素

分 類	能 力 要 素	内 容
前に踏み出す力 (アクション)	主 体 性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実 行 力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計 画 力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創 造 力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発 信 力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾 聴 力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔 軟 性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々と物事との関係性を理解する力
	規 律 性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

う態度は身についた。また、社会常識を身につけることの重要性を常に強調しているため、「新聞やニュースを見るように心がけるようになった」ということは効果として挙げられる。

しかし、「学力を磨く」分野での基礎学力の向上については、「人間性を磨く」「感性を磨く」分野のように、目覚しい成果を達成しているとはいえない状況である。やはり、これまでの学習経験に応じて、何らかの対応をしなければならない。

### 3. 入学生の実態

これまでの実践から、本学科でキャリア教育を実践するための最大の課題は、学生の特性に応じて基礎学力を伸ばすことだということが明らかになっている。そこで、社会人基礎力（表2）と定義され企業社会から求められている要素について、入学生がどの程度自信を持っているか、入学時の基礎学力がどのような状況かということを情報文化学科 2011 年度生 64 名に対して実施した調査（2011 年 6 月実施）・テスト（2011 年 4 月、6 月実施）に基づいて述べる。

#### 3.1 社会人基礎力

企業社会が求める能力ということで、経済産業

省から提案されている社会人基礎力について、学生自身は、大学入学時にどのような意識を持っているのか、自分が現在どの程度の能力を持っていると自覚しているかということを調査した。

学生の社会人基礎力に対する自己評価結果を図3に示す。50%以上の学生が「非常に自信がある」「自信がある」と回答している項目は「主体性」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」である。主に「チームで働く力」とされている能力については自己評価が高いようである。

3つの能力を順に見ていくと、「前に踏み出す力」とされている「主体性」については、かろうじて50%を越しているが、「働きかける力」「実行力」はわずかに50%を下回っている。半数近い学生が「前に踏み出す力」が自分にはないと自己評価しているのである。

「考え抜く力」についての自己評価は最も低く、「課題発見力」「計画力」「創造力」共に、50%を下回っている。特に「課題発見力」「計画力」については、自信がある学生が30%程度で、残りの70%程度の学生が、自分にはその力がないと自己評価しているのである。

唯一自信がある学生が多いのが「チームで働く力」であり、「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」については高い自己評価をしている学

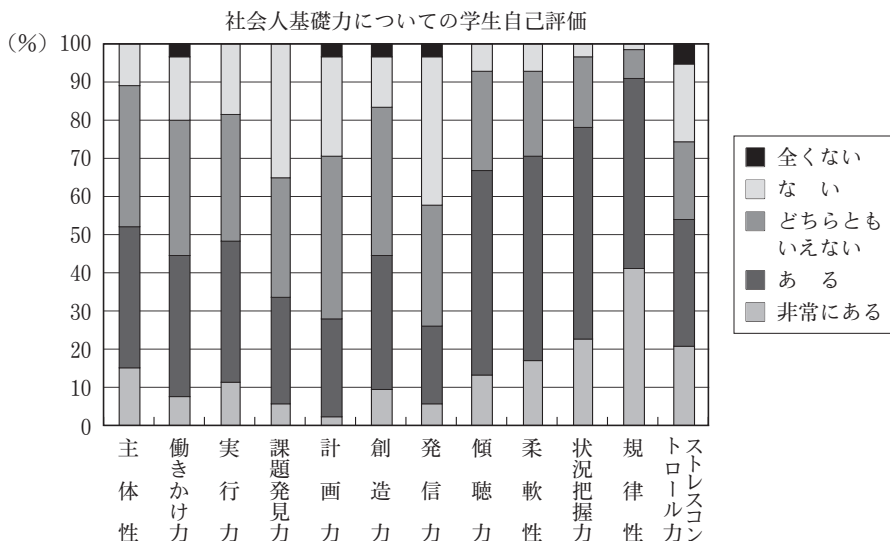


図3 社会人基礎力の3つの能力・12の要素に対する学生自己評価

生がある程度いる。しかし、その中で「発信力」については、全ての項目の中でもっとも自己評価が低く、自信がある学生が30%未満で、残りの70%以上の学生が、自分には発信力がないと自己評価している。「ストレスコントロール力」については、自信があると自己評価している学生が半数程度である。

要するに、「考えぬく力」には自信がなく、「前に踏み出す力」も十分ではないが、チームのメンバーとして誰かにリードしてもらえる状況ならば「チームで働く」自信はある。しかし、自分がリーダーになって発信する力はないため、あくまでもチームの一員としての参加の場合に自信があると考えているようである。やはり、積極性に乏しく、受身の学生が多いことがうかがえる。

### 3.2 入学時の基礎学力

2009年度から毎年、高等学校までの基礎学力に関するテストを入学時に実施している。内容は、国語・英語・数学・理科・社会について、企業が実施する一般常識レベルの項目である。

具体的に、次のような内容を出題している。

国語：漢字の読み書き・文学・古典・ことわざ  
英語：単語・英文（和訳・英訳）

数学：方程式・数列・集合・図形

理科：人体・天体・元素記号

社会：日本史・世界地理・国連機関

理科・社会はそれぞれ50点満点で、他の教科は100点を満点としている。表3に2009年から3年間の平均点、標準偏差、最高点、最低点を示す。難しい問題もある程度含まれているが、惨憺たる結果である。

各教科について、最高点と最低点の落差が大きく、できる学生はある程度できるが、できない学生は全くできないという状態である。入学時の学力格差については、その後のリテラシー科目においても専門科目においても、教師の指導を悩ませている。

「受験経験の有無」についての質問に対して、受験経験があると回答した学生が63%であった。江戸川大学への入試形態はAO入試が45%、指定校推薦が42%と大半が学力試験の必要ない形態での受験である（図4）。高校の受験形態についての問いに対しては「学力試験」での受験が65%で、残りは学力試験のない形態での受験である。これらのことから総合するが、学生が受験勉強をした経験というのは中学校から高校に入るための受験勉強の経験だと考えられる（図5）。

表3 入学時の5教科（国・英・数・理・社）テストの結果

		国 語	英 語	数 学	理科・社会	合 計
2009 年度生 93 名	平 均 点	46.2	22.6	23.1	44.0	136.2
	標準偏差	17.4	14.3	16.2	20.3	49.1
	最 高 点	82	70	76	88	254
	最 低 点	4	0	0	0	22
2010 年度生 92 名	平 均 点	47.8	22.0	23.2	48.5	141.5
	標準偏差	15.9	13.5	16.3	17.1	46.8
	最 高 点	82	68	76	90	287
	最 低 点	6	0	0	8	40
2011 年度生 74 名	平 均 点	49.8	23.3	30.7	53.0	155.7
	標準偏差	16.5	14.0	18.8	20.1	53.8
	最 高 点	88	58	76	87	287
	最 低 点	0	0	4	0	50

受験勉強した経験があるか

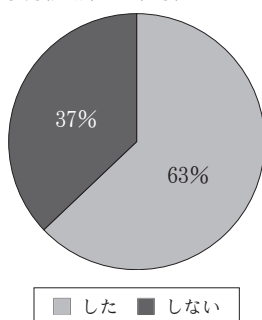


図4 受験勉強経験の有無

高校の受験形態

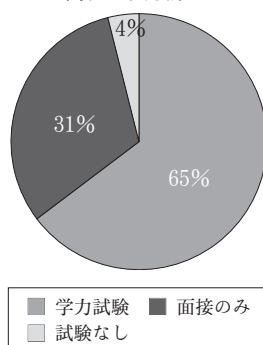


図5 高校受験の形態

学力自己評価 (何年生レベルか)

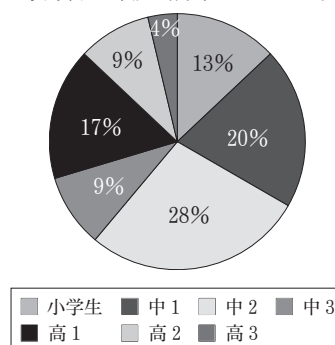


図6 学力の自己評価

「自分の学力が現在何年生レベルだと思うか」という問いに対しては、中1～中3レベルだと回答した学生が57%（中1：20%，中2：28%，中3：9%）と最も多く、高校生レベルだと考えている学生が20%（高1：17%，高2：9%，高3：4%），小学生レベルだと考えている学生が13%いることが分かった（図6）。表3からも分かるように、高校生レベルの問題については、全くついていけない学生がある程度いることが明らかになった。

### 3.3 非言語・言語に関する問題

多くの企業が入社試験で実施しているSPI（非言語・言語）試験で、毎年苦戦する学生が多いため、計算や読み書きについてどの程度の実力があるのかを調べる小テストを実施した。結果を表4に示す。絶句に値する結果であった。学生の学力自己評価で、自分は小学生レベルだと自己評価している学生は、実際に非言語・言語問題においても惨憺たる結果であった。四則計算から復習しなおす必要がある学生も存在することが分かった。また、二桁同士の乗除の計算が学生は苦手だということが明らかになった。

言語問題については、基本的な漢字と熟語の出題であったが、非言語同様に厳しい結果であった。「慰める」という漢字が書けた学生が11%しかいなかった。

これらの学生を、社会に送り出すためには、大学の専門科目の充実も非常に重要であるが、小中

学校レベルからの読み書き・計算技能の訓練が重要になってくる。

また、すべての学生にこれらの技能が身につけていないわけではなく、十分なレベルに達している学生も多くいる。そのため、訓練については一斉授業の形態で実施することは困難である。個々のレベルに応じたフォローアップを検討する必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、これまでに本研究グループが実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組みを概観し、社会人基礎力の育成と学生の学力低下の問題に取り組むための要素を抽出するため、学生が自己の社会人基礎力をどう評価しているか、入学時の基礎学力はどうかという点について検討した。

これまでに、個に応じたキャリア教育を実現するために、基本的な生活を営むための生活習慣の確立、人間性をはぐくむための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育、社会で働くことを意識させるための職業人講話・企業見学・インターンシップなど、さまざまな取り組みを実践してきたことについては高い効果が見られた。

しかし、学生が社会人になるための最も大きな障害として、学力低下の問題があるということが数年間の取り組みの中で明らかになった。

社会人基礎力については、『「考えぬく力」に自

表 4 非言語・言語テストの結果

非 言 語 問 題	正解率	言 語 問 題	正解率
$14+13=$	100%	(あめ)が降る	98%
$57-12=$	98%	鳥が(なく)	94%
$25 \times 54=$	87%	書類を(せいり)する	94%
$58 \div 13=$	59%	(けんこう)になる	91%
$49 \div 23 \times 38$	31%	(てき)に勝つ	91%
$23 \div 32 \div 25$	26%	(さいばんしょ)	78%
$4+(-3) \times 2=$	96%	友達を(なぐさめる)	11%
$3-(-4) \times (2-5)$	67%	遊ぶ(ひま)がない	61%
$14+13=$	93%	節約(同)(消費 倹約 需要 消費 貯金)	57%
$25 \times 54=$	94%	辞職(同)(転職 閑職 左遷 辞令 退職)	78%
$58 \div 13=$	89%	増加(同)(添付 増大 急増 付加 膨張)	54%
$2x+5=7$	91%	安定(反)(移動 不明 延長 危険 動揺)	43%
$x+32=2x+33$	93%	理論(反)(実践 活動 頭脳 空論 熱意)	31%
$0.5x+0.2=0.3x+0.4$	87%	類似(反)(相違 酷似 異同 相似 疑似)	57%
$x+y=3 \quad x-y=1$	85%	収益(反)(過失 損失 取得 紛失 分配)	87%
$2x+3y=13 \quad 3x+2y=12$	81%		
あるクラスに、男子は12人、女子が13人いる。 このクラスの男子の割合は何%ですか。	48%		
ある品物が特売のため定価の20%引きの2080円で売られていました。この品物の定価はいくらですか。	33%		
鉛筆を5本買って500円支払ったところ、50円のおつりをもらいました。鉛筆1本の値段はいくらですか。	89%		

信がなく、「前に踏み出す力」も十分ではないが、チームのメンバーとして誰かにリードしてもらえる状況ならば「チームで働く」自信はある。しかし、自分がリーダーになって発信する力はないため、あくまでもチームの一員として参加する場合に自信がある』と考えている学生が多いようである。積極性が乏しく、受身で協調性のみに自信がある学生が多いことがうかがえる。基礎学力と共に「前に踏み出す力」「考え抜く力」をどう育成するかということも課題だということが明らかになった。

基礎学力については、惨憺たる結果であった。「ゆとり教育世代」と呼ばれ、教えられたことは

ある程度まじめにやるが、真剣に学習した経験が乏しい学生に、読み書き・計算からの技能を教えないといけないのが現状である。レベルは一定ではなく、高い基礎学力を持った学生も入学してきているため一斉指導は困難である。それぞれに、どの段階で躓いているかは千差万別であるため、個に応じた対応が必要になってくる。また、「これは当たり前に行けるだろう」と教師が思ってしまうと大変な事態を招く可能性があることが分かった。

これらの結果を基に、今後、個々の学生に対応した読み書き・計算からの技能習得方法を開発する必要がある。また、個に応じた対応と共に、各

教科の教員がどのように連携するとより学生の学力が向上するかということについて、大学教育のシステマ的な見直しも重要になってくると考えられる。

#### 謝 辞

本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会にご協力くださった皆さま・長崎の皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

#### 参考文献

- 中央教育審議会（2002）中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#06](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#06)（参照日 2009 年 11 月 10 日）
- 大学審議会（1991）大学審議会答申「大学教育の改革について」，文部省
- 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会中間報告書」  
<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoriyoku-reference.pdf>（参照日 2009 年 11 月 10 日）
- 国立教育政策研究所（2007）「キャリア教育への招待」，東洋館出版者，東京
- 厚生労働省「新規学校卒業就職者の就職・離職状況調査結果」（2005 年）  
[http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h18/10\\_pdf/01\\_honpen/pdf/06\\_ksha\\_0101.pdf](http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h18/10_pdf/01_honpen/pdf/06_ksha_0101.pdf)（参照日 2010 年 11 月 30 日）
- 厚生労働省『若年者の就職能力に関する実態調査』結果  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/h0129->

3a.html

私立大学情報教育協会「大学における教養教育」大学教員の授業改善白書

[http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3\\_1.html](http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3_1.html)（参照日 2009 年 11 月 10 日）

総務省統計局「労働力調査」

<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/zuhyou/05401.xls>（参照日 2010 年 11 月 30 日）

総務省統計局「労働力調査特別調査」

<http://www.stat.go.jp/data/routoku/index.htm>（参照日 2010 年 11 月 30 日）

総務省統計局「就業構造基本調査」

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001013823&cycode=0>（参照日 2010 年 11 月 30 日）

玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦（2008）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」江戸川大学紀要『情報と社会』，19，293-303

玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦（2010）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡ——人間力を育成するための教養教育を目指して——」江戸川大学紀要『情報と社会』，20，203-212

玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦（2011）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅢ——職業人との関わりを通じた成長——」江戸川大学紀要『情報と社会』，21，245-257

柳井晴夫（2005）大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究，基盤研究 B